
1 + 1 = 1

そらのはて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 + 1 = 1

【ZPDF】

N7107B

【作者名】

そらのはて

【あらすじ】

オレはお前で、お前はオレだった。

夏でジメジメした教室に
「あついな」

ひと一言つぶやく。

半袖の白シャツが汗でべっしょりになる。

8時前の教室にはまだ誰もいない。

まあ、こんな朝早くから教室にいる奴はたいてい変わり者か眞面目に生徒指導を受けている不良ぐらいだ。

じゃあ、朝早く来ているオレは変わり者っつか。

教室には鳩の鳴き声の静寂に響き渡つていた。

「浅見おまえ朝早いって変わってるな」

教室の後ろに座つている浅見という女に話しかける。

「あんたほじじゃな」けどね

「いっはすこぶる朝の機嫌が悪い。
見た目はギャルっぽい不良。
ミニスカに眉剃り。

「なんで朝早いんだ?」

浅見はため息をついた、 オレの手に散らかせるように自分の右手を見せた。

ふと手の甲を見ると青くなっている。 なんで朝早く来てるのかは一目瞭然だった。

もつと女の子らしくすればいいのに。

「マジ、 一年下にガンつけてくる奴がいたからちよつとしょっぴいただけなんだけどねえ」

「ふうん」

オレはそれだけの会話を終わらせ自分の席に着き机に頭を伏せた。

浅見と初めて出会ったのは・・・そつだなあ、 お互に物心が付いたときには既にそばにいた。

あの頃は家が近くて知らない間に仲が良くなっていた。

学校から帰るとよく遊びに行つた気がする。

今となれば友達関係とかで男、 女二人で遊ぶとかありえない事だけど。

それにしても変わったなアイツ。

ギャルに不良か。

絶対、 怖くて男とか寄り付かないだろうな。

・・・つてオレも男か。

昔からの付き合いだから怖くはないんだよな。

幼なじみ、 そんな言葉で片付けられないよな。

浅見とオレは一人で一人だった。

浅見はオレの半身であり
オレは浅見の半身だった。

初体験は中3だったかなあ。

浅見が

「ね、あたしたちってこれからもこんな感じなのかな?」

浅見は無言のままオレの体に体重を預ける。

オレは浅見の髪の中に静かに顔をうずめた。言葉にせずともお互
いに何をするとか何を求めるとか分かつていた。

二人は元々一人だった。

そして二人には甘く切ない恋というのはなかつた。
ただ当たり前かのように一緒になつっていた。

「あんたいつまで寝てんの?」

目を開けると浅見の顔が見えた。

どうやら、朝からずっと眠つていたらしい。記憶が曖昧だ。

「朝早く来ても意味ないんじゃないの?」

浅見は前の机に尻をついたまま目を覚ましたばかりのオレを見下ろ
す。

「今、何時間目?」

「昼休み」

「すげえな。先生とかよく起こしなかったな」

浅見が呆れたように言つた。

「全部移動教室だつたからね」

「そつかあにしても腹減つたな。飯どつしそうかな」

「あんた、のんきだね。それより体調とか大丈夫?」「ん、いやそんな事はないけど。」

・・・嘘をついた。

実際には、最近体調が悪い。

何故か急に眠気が来て、まるでオレが消えそうになる。いつもなら一緒になる時ぐらいなのに最近は思い出すだけで・・・。

「ねえ昔の事思いだしてたの?」

「ああ、よく分かつたな」

「もう思いださないで。なんかイヤな予感がする」

「分かつてる」

「じゃないと・・・アンタ」

浅見が真剣な眼差しでこちらを見る。

見せられる。

「分かつてゐる。分かつてゐるから口に出さないでくれ。出したらもつとなりそうな気がする」

自分で言つた事に怖くて浅見の鋭い視線をそらした。

「・・・」

浅見は何事もなかつたかのように席に座つた。

まだ、浅見とオレと思つてゐ事がわから合ひてしまつ。
これが彼氏彼女とかなら、まだしもオレ達はそんな関係じゃない。
一人が一人。
オレは浅見の半身であり、浅見はオレの半身。

「私、なんか雅史が消えそうな気がする」

そんな事を言つたのはいつの日以来だる。
それからだ。 オレの体に違和感を感じ始めた。

「ねえ、しょ」

曇つた浅見の声。

いつものよつに身体を重ねた。

だが急に

オレはここから消えてしまつといつ錯覚に捕われた。 いや、そう

なうとしたかもしない。

「ちょいー。」「レ以上はダメ……。」

浅見もそれが分かつたらしく。

「なんか雅史が私の中に吸い込もうとした

そんなことを口走った。
乱れた服を整えそして

「やつぱり終わらせよう。……」の関係を

「じゃないと、あたし耐えられない。雅史が、雅史が消えそつで

「浅見……」

オレの渴いた声がてる。

「お願ひ……。」

そう言つた途端、浅見の目から涙がとめどなくながれた。

それから一ヶ月、一ヶ月と過ぎ

半年、そして一年。

オレ達は一言も言葉を交わさなくなつた。

そして、オレと浅見の関係は終わりを告げたかと思つた。

だが、その終わりはまだ終わらなかつた。

二人の関係はそこで終わらなかつた。

「ねえまた始めみたいの」「
約一年ぶりの会話。

あの屋上の上に呼びだされた。

夕日が眩しく茜色に光る。

浅見から話し掛けてきた。伏せ目だつた浅見がオレのことを直視する。

「あの時みたくじやなく友達でいいの。あんな触れ合ひはもう・・・
イイ。だからお願ひ」

「ああ」

終わらせようとしていても終わらない関係。
見えない何かが二人を一人にしようとしていた。

そして、今もまた放課後に呼び出された。
あの屋上の上。夕日が眩しく茜色に光る。

「ねえ覚えている。あの時の事?」

「ああ」

「わたし・・・あなたのそばにいたいの」

浅見がしゃくり上げた。

不良には似合わない涙を流していた。

そうだ、あの時からだ。

浅見は変わらうとしていた。 オレの事を嫌いにならうとしていた。

でも、出来なかつた。

見えない何かが二人を一人にしようとしているから。

オレは浅見の髪の毛にそつと髪を埋めた。

「浅見・・・」

「違うの雅史。 私ひとつになりたいんじゃなくて一緒にいたいだけなんだよ」

「そうじやないだろ。 分かつてんだぜ。 オレは浅見の半身であり浅見はオレの半身なんだ。だから・・・」

「雅史だめー消えちゃう」

「大丈夫だ。心配するな」

「本当に?」

だが答えとは裏腹に

二人が一人、オレ達がひとつになつていくのを感じられた。

オレが浅見の中に溶けていく。

温もりに埋没していくかのように。 消えていく中浅見の声が聞こえた。

「雅史！待つて雅史！お願ひだから。ねえ！」

オレの意識はだんだんと遠ざかり浅見の叫び声だけが聞こえた。

「雅史、一緒にいるつていつたじやない」

「ごめんな、浅見。

そして、さよならだ。

意識はそこで途絶えた。

それから三ヶ月

今日も放課後の屋上に来てあの茜色の夕日を見て私はアイツの事を思い出す。

まるで、夢のような出来事だった。

アイツが私。

私がアイツ。

今でもアイツは私の中にいる。

ねえ、アンタはこんな結末でよかつたの？

別にいいんじゃねえの

オレはお前でお前はオレだから

そんな声がどこからともなく聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7107b/>

1 + 1 = 1

2010年10月15日21時22分発行